

The #4 batter of the Seibu Lions Kazuhiro Kiyohara.

The champion who became god George Foreman.

Outstanding jockey Yutaka Take.

In the stadium, various stories come and go; The stories are filled with drama and excitement.

A collection of sparkling non-fiction short stories.



スタジアムで会おう

山
陰
淳
司

スタジオで会おう^あ

やまぎわじゆんじ
山際淳司



角川文庫 9987

平成八年四月二十五日 初版発行

発行者——角川歴彦

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二—十三—三

電話 編集部(〇三)三三三八—八四五—
営業部(〇三)三三三八—八五二—

〒一〇二 振替〇〇一三〇—九—九五二〇八

印刷所——新興印刷 製本所——文宝堂

装幀者——杉浦康平

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。

落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブック・サービス宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

©Printed in Japan

スタジアムで会おう

山際淳司



角川文庫 9987

目次

スタジアムからの贈り物

五

I ヒーローのいる風景

されど四番打者

三

「神」になったボクサーとの対話

二六

II スポーツつれづれ草

四二

III サラブレッドと語ろう

ビッグレース

一六

武豊と「三強」の時代

一八五

ジャパンカップ一九九一

二〇六

遠ざかる祝祭くあとがきにかえて

二三八

スタジアムからの贈り物

一九八〇年四月初旬のある日、ぼくはジョージア州アトランタのエアポートで出発の遅れている乗継便を待っていた。航空会社の係員は到着便が遅れているのでどうしようもないといって、お手上げの状態だった。ぼくは頭の中で何度も時間を計算した。アトランタを飛びたってしまうと、同じジョージア州のオーガスタまでは一時間弱。荷物をピックアップし、レンタカーを借りるのに約二十分、そこからナショナルゴルフクラブまで、どれくらいかかるものか、わかっていなかった。着いたらまずプレスタグをもらうための手続きをしなければならぬ。それからコースに出ていくのである。約束の時間に間にあうだろうか心配になった。

その年のゴルフのマスターズ・トーナメントが始まる前々日のことで、その日、日本の青木功選手が練習ラウンドに出ることになっていた。その練習ラウンドからマスターズにおける青木功のゴルフを見る約束になっていたのである。それ以前から例えばアメリカの野球やフットボール、ヨーロッパにおけるサッカーなど、旅の途中でチケットを買い、観

客としてスポーツを見ることはあったが、いわゆる「プレス」の登録をしてアメリカのスポーツイベントを取材するのは、じつはそのときが初めてだった。そのせいもあって、フライト待ちでやきもきしていたアトランタ空港のことはよくおぼえている。ニューズスタンドで雑誌を買い、読んでいるうちにうとうととしはじめたこと。浅い眠りの中でアナウンスを聞き、あわてて手荷物を持ち走りはじめたこと。ついきのうの出来事のように思い出すことができる。

青木功の練習ラウンドにはかろうじて間にあつた。オーガスタのコースは、いうまでもなく戦略性に富んでいる。一ホール進むごとに新たなトラップが用意されている、という感じた。青木選手は一ホール終わるごとに、自分にいい聞かせるようにそのホールのポイントの説明してくれた。次のホールは、と聞くと、かれは即座に攻めどころを指摘する。そして、見ているとかれはポイントを少しも外すことなく、マスターズのコースを攻めきっていくのである。リラックスしていたのかもしれない。それはみごとにゴルフだった。トーナメントがはじまったら、ぼくは青木功の四日間、72ホールのたたかきを書いてみるつもりでいた。そのためのスペースも雑誌におさえてあつた。

ところが、どうしたわけか、青木は予選落ちしてしまったのである。あれだけ完璧なゴルフをしていたのに突然崩れるとは……。信じがたかったが、それが現実だった。かわりに、スペインからやってきた若いゴルファーが、ウッドもアイアンも存分に振り回してマスターズを制してしまった。セベ・バレステロスである。

それ以後、いったいどれだけのスポーツシーンを見てきたのだろう。「何が起きるかわからない」——というのがビッグゲームの面白さである。ヘビー級のボクサー、マイク・タイソンがアトランティック・シティーでマイケル・スピックスと対戦したのは一九八八年の初夏だったろうか。無敗を誇るスピックスとタイソンの対決は今世紀最後のビッグファイトと呼ばれていた。その試合、両者の入場が遅れ、リングの上に白々とした時間が流れ、トイレに立つ人も少なくなかった。ところがゴングが鳴ると1ラウンド、わずか91秒でタイソンがスピックスを倒してしまったのである。喚声があきおこること、ほんの数回。人垣で何も見えないうちに試合が終わってしまったという人もきつといただろうと思う。

スポーツの感動は、第一義的には、ライブにある。その瞬間の、肉体の躍動、あざやかなパフォーマンス、信じがたい逆転劇……。こういったものは、その場で時間を共有していないと味わいがたい。映像や活字によって瞬間のエッセンスを残すことはできるが、ややもすると二義的なものになってしまう。ただ記録を残すだけでは、スポーツを補完することにはかならないのである。

スポーツファンはライブの魅力を知っているから、常に新しいライブを求めつづける。次のビッグファイトは？ 次のビッグゲームは？ 新しいヒーローは誰なんだ？ スポーツジャーナリズムも基本的にはその線に沿っている。新たなスポーツシーンを追いつけるのである。

その面白さは、ぼく自身、よくわかっているつもりだ。日本のプロ野球のペナントレース終盤のデッドヒート（毎年、エキサイティングだとは限らないが）、そして日本シリーズへと盛りあがっていく初秋の日々。大相撲が千秋楽を迎える週末の、両国の国技館界隈かいわいの独特な活気。アメリカ野球、アメリカン・リーグ、ナショナル・リーグそれぞれのプレーオフ（東西両地区優勝チームによって争われる決勝戦）をカバーしながら、そのあとに行われるワールドシリーズまで、異様な熱気に包まれたファンとともに見て回ったことも、ぼくにはある。

しかし、それだけがスポーツではない、ともぼくは思うのだ。

「キャンプのころから野球をフォローし始めると、一年間に二百近いゲームを見ることになるんだ」

と、ニューヨークのシェイ・スタジアムのプレスボックスで隣りあわせたスポーツライターがいていた。アメリカ野球のペナントレースは、レギュラーシーズンのゲームだけでも162試合ある。

「十年つづけると膨大な数のゲームになる。私はもうかれこれ二十年近くゲームを見てるんだ。たいへんな数だよ。何が残ると思う？ ワールドシリーズの優勝シーンも何度も見た。パーフェクトゲーム、九回裏の逆転劇、ルーキーのあざやかなデビュー。たしかに素晴らしい。しかし、熱気はすぐにさめてしまうものだよ。ボールパークをわかせたヒー

ローも、いつの間にかいなくなってしまう。あれだけ光り輝いていたはずなのに、という男が秋の冷たい風の吹く日にコートを着てひとり寂しくスタンドからゲームを見ていることもある。皆、フェードアウトしていつてしまう。かといって何も残らないわけじゃない。記録？ それは活字として残るものだろう。そうじゃなくて、時折、何でもないシーンが突然よみがえってくるんだ。トム・シーバー（NYメッツの投手だった）のピッチングフォーム、レジー・ジャクソン（NYヤンキースの主砲だった）が三振してホームベースにヘルメットを叩きつけた^{たた}たこと。忘れてもいいようなディテールが、Tボーンステークにこびりついて離れない肉のように記憶のすみにからみついている。スコアブックには残らない記憶だな」

そういつてかれは、ワープロを叩く手を休め、パイプに火をつけた。なかなかいいことをいうな、とぼくは思ったものだ。

たしかに記憶のすみに残りつづけているものが、ぼくにもある。やがてそれがぼくの意識の中で熟成され、何ものかに向けて結晶していくのだろうと思う。

しかし、そればかりではない。

ぼくがこの十年あまり、スポーツを見つづけて感じたことの一つは、なぜ自分はいつもゲームを見る側にいるのだろうか、ということである。それが自分の役割なのだ、といっ

てしまえば、それまでの話である。しかし、スタジアムには二種類の人間がいるのだとい

うことにも気づかざるをえない。つまり「行動者」と「傍観者」である。観客は受け身の存在としてじっとスタンドに座りつづけることしかできない。できることといえば、応援したり悪態について気分を晴らすことぐらいだろう。それよりもむしろ、ぼくは例えば打たれてもマウンドに立ちつづけるピッチャーのほうがいいと思う。敗戦投手であろうが、かれは自分で手ごたえをつかむことができるからだ。何かを見て、感じて、表現するだけでは不十分なのである。自分が何かを生みだす主体となること、そういうアクティブな姿勢をもっと持ちつづけていい。失敗してもかまわないではないか、それもまた自分の心の中にちゃんと手ごたえとして残りつづけるのである。

そういう考え方も、またスポーツを見る中から芽ばえてきたものだ。スポーツは、そういう角度からも人を刺激することがあるのだと思う。

スタジアムには、いろいろなものがつまっているのである。

I ヒーローのいる風景

されど四番打者

ロッテオリオンズの小宮山悟投手が開幕戦の先発をいわたされたのは、所沢で行われる対西武ライオンズとのオープンニングゲームの一週間前のことだ。平成三年（一九九一）のプロ野球である。

小宮山はプロ入り二年目のピッチャー。早稲田の野球部を経て、ドラフト一位でロッテに入団。一年目のシーズンは六勝十敗二Sの成績だったが、シーズン終盤で西武打線を二試合続けて完封している。そのピッチングが評価されて、対西武のオープンニングゲーム、先発投手を任されたわけである。小宮山はライオンズの四番打者、清原和博にも強かった。昨シーズンは21打数でわずかに3安打、5三振を奪っている。パ・リーグの規定投球回数に達したピッチャーの中で、清原が最も苦手としていたのが、この小宮山である。

小宮山は自信をもって開幕戦のマウンドに上がれるはずだった。前夜、緊張して眠れないようなことはなかった、とかれはいう。自分では落ち着いていると思っていた。先攻はロッテ。先頭打者の西村徳文がバッターボックスに入り、西武の開幕投手、渡辺久信が第1球を投げた。それを見たとき、三塁側のダッグアウトの近くにいた小宮山は突然、心臓

の鼓動が速くなるのに気づいた。一気に緊張の波が押し寄せてきたのだ。開幕戦特有の緊張感というものだろう。

それからさほど時間が経っていない一回裏、一死ランナー二、三塁の場面で小宮山は清原をバッターボックスに迎えた。初球、ストレートを真ん中に投げこみ、2球目は外角に外す。カウント1―1からの3球目、小宮山はインサイドの低めに速球を投げた。

「自信をもって投げた球」だったという。それを清原は内側から巻きこむようにして楽々とレフトスタンドまで運んでいった。九〇年の開幕戦につづく、清原の二年連続初打席ホームランである。この試合で清原はもう一本ホームランを打ち、ここでもまたかれは二年連続開幕戦2ホームマーという記録を作った。

打たれた小宮山は、なぜあのインサイド低目の速球を打たれてしまったのか、考えあぐねた。あの球を打たれるはずがないと思っていたからだ。くりかえし、ビデオも見た。コースは甘くない……とすれば、ヤマを張られたのか、配球が悪かったのか……。

開幕戦の清原のホームランはパ・リーグの投手にインパクトを与えた。その直後に対決が予定されていたオリックスブルーウェーブのサウスポー、星野伸之は清原が小宮山から打ったホームランをビデオでチェックしている。やはり清原は勝負球を狙^{ねら}ってくるバッターだと、星野はあらためてそう感じたという。昨シーズン、小宮山はインサイドのシュート気味の球で清原をうちとっている。そういうデータはどの球団も把握している。その内角球を打つことによって清原は小宮山に借りを返したわけである。星野は清原に対して

「初球からカーブは投げられない」と思った。星野と清原の対決はいつも、カーブがポイントになっているからである。清原がプロとしてデビューしてほどなく、星野は「二十年にひとりの逸材」といわれたルーキーと対決している。結果は3球三振。星野が完璧に投げ勝ったのだが、そのとき星野は自分の最も得意としているカーブを清原があえて打ちにきている、と感じとっている。清原はそういうバッターなのだという印象を、星野は持ちつづけていた。

清原と星野のシーズン初めての対決は四球だった。初回からコントロールの定まらない星野が秋山幸二、清原を歩かせたところでデストラーデにホームランを打たれ、ライオンズを勢いづかせてしまった。

チーム同様、清原の九一年のシーズンのスタートは悪くなかった。開幕直後の七試合で6ホームー。出来すぎといってもいいくらいである。

しかしそこから、清原和博の長いシーズンが始まったのである。

清原和博の一九九一年のスランプ。四番打者がこれほど長いスランプに陥るのは珍しい、とさえいわれた。打つことではなく、打てないことで注目されるのもまた、四番打者なのである。ぼくは打てなくなった四番打者に興味を抱いた。

四月十六日、西武球場で行われた対日本ハムファイターズ戦で清原は二本のホームランを打っている。第5号、6号。それによってホームラン、打点の両部門でトップに立った。長いトンネルはそのあとにやってくる。以後35試合、151打席、一本もホームランが

出なくなってしまうのだ。打率も急激に下がりはじめ、二割を切るのではないかといいところまで低下していった。福岡ダイエーホークスのピッチングコーチ、権藤博は清原に対して徹底した内角攻めを投手陣に指示していた。長打をおそれて外角球で勝負するから清原に打たれる、外を見せ球にしてインコースで勝負すれば、清原を封じることができ——というのが権藤コーチの持論である。それが打率を落としていく清原には効き目があった。おまけに清原は、そのダイエーの投手、村田勝喜の球をファールグラウンドに打ちあげたときに左手首を痛めてしまった。五月初めのことだ。

そのほぼ一カ月後、清原は対近鉄バファローズ戦で野茂英雄投手から久々の第7号ホームランを打つのだが、神戸に遠征すると伊藤敦規投手（オリックス）から左手に死球。次の試合は欠場することになった。不振は断続的につづき、七月に入るとついにスターティングメンバーから外されるといふところまで落ちこんだ。プロ入り六年目にして清原は本格的な「スランプ」に入りこんでしまったのである。

西武ライオンズのバッテリーングコーチ、広野功は、毎年テーマを決めて清原のバッテリーングを完成に近づけてきた。ゆったりとした、大きな構え。フォロースルーの大きさ。左足を踏みだしたときに、その左足で作らなければならぬ壁のたしかさ。軸になる足を中心に回転していく体の柔らかさと、その筋力の強さ。それらを生かすために、毎年少しずつ打法を変えながら、よりよいバッテリーングフォームを追い求めてきた。

プロ入りして最初の五年間、清原はバッテリーングのタイトルこそ獲っていないが、その